

大型クラゲ分布調査

(大型クラゲ出現調査及び情報提供事業)

福井克也・向井哲也・村山達朗

1. 研究目的

近年、日本沿岸に大量に来遊し大きな漁業被害を与えている大型クラゲの出現状況を、調査船による洋上調査、操業漁船からの聞き取り調査等により迅速に把握し、大型クラゲの分布状況に関する情報を漁業関係者に迅速に提供し、漁業被害を低減することを目的とする。

2. 研究方法

(1) 洋上分布調査

2007年8月23日～28日にかけて隠岐島北方～対馬西方の海域の20地点において、調査船「島根丸」によりLCネットを使用して大型クラゲを採集した。採集したクラゲは個体数、傘径、及び感覚器官の間隔を測定した。

(2) 洋上目視調査

10～12月に計4回、調査船「島根丸」により島根県沖の12地点において、船上から目視による調査を実施した。調査は各定点から2マイルの距離を航走する間、ブリッジ上両舷から目視された大型クラゲを計数した。

(3) 陸上調査

県内主要漁協からの来遊状況の聞き取りと定置網漁業および小型底びき網漁業の標本船調査を実施した。標本船は、定置網漁業5ヶ統と小型底びき網漁業5隻に依頼した。定置網では8月から12月までの期間、操業ごとの入網数、大きさ、被害状況、対策実施の有無について記入を依頼した。小型底びき網漁業については、9月から翌年1月までの期間、操業地点ごとの入網数、大きさ、被害状況、対策実施の有無について記入を依頼した。

3. 研究結果

(1) 洋上分布調査

大型クラゲの採集個体数は1地点0～18個体

で、山口～島根県沖合域で比較的多く入網があった。九州北部海域では同時期に沖合底びき網漁業でかなり大量にクラゲの入網が報告されていたにもかかわらず、本調査では入網は認められなかった。

(2) 洋上目視調査

調査ごとの目視個体数は、10月初旬が4個体、10月下旬が17個体、11月中旬が15個体、12月中旬が7個体といずれも少なかった。調査では12月を除き、県西部の沿岸近くの定点で比較的多くのクラゲが目撃された。

(3) 陸上調査

平成19年度の定置網での入網数は最大で3500個/日程度であり、大量にクラゲが来遊した平成18年（最大1万5千個/日以上入網）に比べれば少なかった。ただし、平成19年は時期的に遅くなってからクラゲの数が増え、11月下旬以降の遅い時期に出雲部や隠岐島後地区の定置網で突然1000個以上の大量入網が続くというこれまでにないパターンを示した。小型底びき網では9月から12月にかけてほとんどの操業位置で大型クラゲの入網が見られた。調査期間中ほとんどが10個体以下の入網であり、大量発生であった2005年のように曳網すらできないほどの大量入網は起こらなかった。